

月の欠片(かけら)

河原 一夫

第一部 スルタンとイブラヒム

アラビアは、古代ローマ人から三つの地域に分けて呼ばれていた。即ち、アラビア・フェリックス(幸せなアラビア)、アラビア・ペトラエ(岩のアラビア)、そしてアラビア・デゼルト(沙漠のアラビア)である。

サウジアラビアのほとんどの地域は、イエメンに近いアシールなど西南部を除き沙漠地帯でアラビア・デゼルトに属した。しかし、その中部にあるナジド(高地の意)にはイスラムを奉じる強大な王国が築かれ、石油に因る巨万の富を得て情況は一変した。今、まさにナジドはアラビア・フェリックスである。

古代ローマ人が現在を目のあたりにしたら、きっとそう呼んだに違いない。この物語は、ナジドの中心、サウジアラビア王国の首都リヤドにおける峻巖(しゅんげん)なイスラムと激的な反米・反政府テロ、そして石油にまつわる話を中心に展開される。

プロローグ

人っ子一人いないアル・コザマ・ホテルのプールサイドでイブラヒムはうたたねをしていた。

燦燦(さんさん)と降り注ぐ、一月のリヤドの太陽は、未だ灼熱(しゃくねつ)の国らしい厳しさを残してはいるものの、あの肌を突き刺すような夏の勢いは既に無く、心地良いものへと変わっていた。

この厳格なイスラムの国・サウジアラビア(サウジ)ではビキニ姿のグラマーな女性が男性と同じプールに入ってくることは決していない筈(はず)だが、若いインドから来たばかりのイブラヒムにはふっと現れるような錯覚が、まだ、あった。

あるいは、たった一晩で湯水のように大金が流れ込んで来たことが、彼にそんな夢想をさせたのかも知れない。

「それにしても上手くいったものだ。波に乗るとは恐ろしい。ちよっとした口利きで三〇万ドルが転がり込んだ。濡(ぬ)れ手で粟(あわ)とはこのことだ」、「

「まるで夢のような話だ」、「

「あのプリンスのお蔭(かげ)だ」

と、そうまどろみながらつぶやくと、イブラヒムは、その彫りの深い端正な目鼻立ちに思わず笑みを浮かべていた。イブラヒムはインド南部の出身だったが、先住民のドラビダ系ではなく上流階級特有のアーリア系の顔立ちにまぶしいほどの美しい気品を漂わせていた。肌も真っ黒ではなく褐色だった。そして、彼はその名の示す通りムスリム(イスラム教徒)だった。

そこに、いきなり、モスクのミナレット(尖塔(せんとう))に取り付けられたスピーカーからサラート(礼拝)にモスクに集まるよう促す呼びかけの声、アザーンが流され、イブラヒムは目が覚めた。

それは、周囲の静寂を突き破る、高く、鋭く、そして、勢い良く伸びた、艶(つや)やかな声だった。これから昼のサラートが始まるうとしていた。

「アッラアア、フ・アバル(アラーは偉大なり)」、「ア

と嘯(うそぶ)くと、褐色に光る、十分に鍛え上げられた、その精悍(せいかん)な肉体は真つ青な水を湛(たた)えたプールに水しぶきを上げて吸い込まれていった。